

ことばが意味すること

—Toni Morrison *Beloved* について (2)

永 瀬 美智子

スイスの言語学者フェルディナン・ド・ソシュール (Ferdinand de Saussure 1857-1913) はそれ以前の「コトバはモノの名前である」という一般的に考えられていた伝統的な言語観を否定し、「いくつもの要素が働きかけ合うシステム」¹⁾と捉えた。ソシュールに拠れば、我々がひとかたまりの単位と考えるコトバは「シニフィアン (signifiant)」(意味するもの=音響イメージ)と「シニフィエ (signifié)」(意味されるもの=概念)とで構成される「シーニュ (signe)」[記号]である。『現代思想のパフォーマンス』においては、このことばの捉え方を『不思議の国のアリス』(*Alice's Adventures in Wonderland*, 1865)に散見されることば遊びに応用して解説し、作者 Lewis Carroll (1832-1898)の意図したユーモアを明確にしている。このようなことばの捉え方を Toni Morrison の第5作目の長編小説 *Beloved* (1987) に応用すると、同一のシニフィアンに複数のシニフィエを認めることができる。

作家が作品に使用することばを意識的に選択するのは当然のことであるが、Morrison は極めて注意深くことばを使用する作家のひとりであると言えよう。Morrison は *Beloved* において、とりわけ主題と関連することばに意匠を凝らしていることが見て取れる。例えば、“rememory” という造語や、主要な登場人物たちが奴隷時代に体験した辛い記憶を思

い出さないように努める行為は、“forget”ではなく“disremember”という一般的にはそれよりも遥かに使用頻度の低い語が使用されている。“rememory”について、作中の Sethe は次のように説明している²⁾。過去に体験した出来事のことを人は記憶（memory）として覚えているものも忘れて（forget）しまうものもあるが、“rememory”とは、個人が持つ記憶とは別にその出来事が起きた場所と一体化して存続する「記憶」であり、本人以外の人々がその場を訪れたときにそれを知覚できるものである。またそれを思い出す行為を表す動詞としても使われている。また、“disremember”という語は、過去の忌まわしい記憶を封印して「思い出さない」努力をしている登場人物たちにとって、それらが「忘れること」が到底不可能な記憶であるゆえに、“forget”ではなく“remember”することを拒絶するという意識を言外に含む。

Beloved において明らかに意識的に選択されたと考えられる語が、プロットの進行とともに他の意味合いを持つようになったり、時には対極の意味にさえ変化したりすることが示される。“keeping the past at bay” (51) の毎日を送る Sethe や、胸の内にしまった煙草の缶の中に過去の記憶を封印した Paul D の過去が断片的に明らかにされながら、母親 Sethe による子殺しという中心となる出来事に至る過程で、鍵となる語が示唆する意味合いは絶えず変化していると見なすことができる。そのような語の意味の変化や多重化と見なされる変更は、それらをシーニュと捉えてシニフィアンとシニフィエの視点から見ると、その変化がより明確になるのではないだろうか。同一のシニフィアンであってもそれと結びつくシニフィエは固定化された概念ではなく、物語が展開する過程で、概念の言わば重層化が起きていることが分かる。本論では *Beloved* において意識的に使用されている語（シーニュ）のシニフィエの変化を論じ、そこに内包される概念が主題と如何なる関係にあるかを探る。

シーニュを構成するシニフィアンとシニフィエとが一对一の単純な対応になっていない例として、中心となる登場人物たちがかつてその奴隷だった Sweet Home がまず挙げられよう。Beloved は、物語の現在である1873年にケンタッキー州にあった Sweet Home の最後の奴隷だった Paul D がその奴隷仲間だった Halle の妻 Sethe を訪ねるところから始まる。Sethe もまた18年前に Sweet Home から逃亡した元奴隷であり、かつて夫 Halle の母親 Baby Suggs が住んでいたオハイオ州シンシナティ郊外ブルストーン通り124番地に娘の Denver と二人で暮している。コミュニティとの接触を断って母親 Sethe と二人きりで暮らしている娘の Denver にとって、Sethe と Paul D とが語る Sweet Home 時代の思い出話は、自分が生まれる以前の別世界の出来事である。なぜなら Sweet Home から逃亡した Sethe は、先に逃がした3人の子供たちが Baby Suggs と待つブルストーン通りの家に向かう途中で Denver を出産したからだ。そのため二人が語る世界から自分は排除されていると感じた Denver は拗ねて次のように言い放つ。

“How come everyone run off from Sweet Home can't stop talking about it? Look like if it was so sweet you would have stayed.” (16)

Denver は客に対する不作法な発言を Sethe に窘められるのであるが、この“Sweet Home”が決して“sweet”でもなければ“home”でもなかったことを Paul D は認めている。断片的に明らかにされる過去はそれを具体的に示すものだ。

このプランテーションの持ち主で奴隷主の Mr. Garner が名付けた“Sweet Home”は、彼が活着している間は一見“sweet”や“home”が本来の概念に近い概念と結びついているように見える。もちろん名付け主の

Mr. Garner の視点から見ればその結びつきは全く疑念の余地がない。Mr. Garner は奴隷たちの自主性を認め彼らの意見に耳を傾ける、周囲から「変り者」だと見なされていた奴隷主である。また、彼は Sethe の夫の Halle が、腰を痛めてもはや歩くこともままならない母親 Baby Suggs を奴隷主の Mr. Garner から「借金する」ことによって買い取って自由することに同意し、Halle が借金返済のためのお金を稼ぐために、Sweet Home での労働が休みになる日曜日に Sweet Home の外に働きに出かけることを許す。このように Mr. Garner 自身が自負する物わりの良さは、彼の死後 Sweet Home の管理を任された彼の義弟である Schoolteacher が奴隷たちを家畜のように扱うことと比較すれば一目瞭然である。

しかし、自由を得た Baby Suggs が、自分の手や足を初めとして身体の各部分や胸の鼓動が他の誰でもない自分のものであることを認識する瞬間や、後に説教師としてコミュニティの人々に、自分の身体の部分をそれぞれ愛せ、と呼びかける場面に示されているように、Sweet Home では周囲の農園と比較すれば破格の自由が認められていたとはいえ、その自由はあくまで制限付きであり、奴隷として他人に所有されていたことには違いがない。奴隷主の所有物である奴隷は、自分の身体を自由にするためにはその身体の自由をお金で買い取らなければならない。したがって、“Sweet Home” という名称が所有される奴隷たちにとって文字通りのシニフィエではなく、“sweet” や “home” とは異なる概念と結びついていると言えよう。もっとも Mr. Garner の死後 Garner 夫人が呼び寄せた Schoolteacher と甥たちの容赦ない奴隷の扱いによって、“Sweet Home” のシニフィエは対極に変化すると見なすことができるのであるが、それを考慮すれば、まだその音響イメージと概念のズレは小さいと言えるだろう。

“Sweet Home”のシニフィエは Paul D と Sethe との会話が明らかにする過去の断片によって、やがて全く別ものと結びつくことが分かる。Sethe は訪ねてきた Paul D から、彼が最後に目撃した夫 Halle が顔中にバターを塗って茫然自失の状態だったこと、それが Schoolteacher の監視の下に甥たちが Sethe を押さえつけて彼女の母乳を奪っている場面を納屋の2階から目撃していたことが原因となっていたこと、Paul D は Halle の異常な様子を目撃したにもかかわらず、家畜のように口にハミ (a bit) をはめられて口がきけなかった事実を知らされるのである。現在、感覚を失った Sethe の背中に残る “a chokecherry tree” は、病床にある Garner 夫人に Schoolteacher たちの仕打ちを訴えたために、身重であるにもかかわらず酷いむち打ちの罰を受けた名残である。逃亡に失敗して捕えられた Sixo が奴隷として不適格だとされ生きたまま焼かれたことや、Schoolteacher が甥たちに Sethe の動物としての特徴を書かせる場面に示唆されるように、彼らが奴隷たちを人間としてではなく動物として扱ったことが明らかにされるにつれて、“Sweet Home” は本来の音響イメージとは対極の概念を持つに至る。

“Sweet Home”のシニフィエが正反対の概念を持つために、それに関係するすべての要素が否定的に捉えられている。Sethe は Sweet Home から逃亡して18年を経て、Sweet Home で他の奴隷仲間と共に集った Brother と名付けた木を初めとして木々が美しかったことを思い出すが、美しいと思ったことに罪悪感を抱いている。なぜならそれらの樹木は美しさと同時に、奴隷仲間が首を吊られてぶら下がる光景を想起するからであり、決して美しいものとして思い出してはならないものだからである。

Sethe が甥たちに奪われた「母乳」にも単なる母親の乳房から分泌する乳という概念に付加される意味を認めることができる。それは Sethe

が母親の母乳ではなく、母親とは別の、母乳を飲ませる役目を担った女奴隷が他の赤子に飲ませた後の余った母乳で育てられ、時には無くなってしまふこともあったという生い立ちに起因した母乳に対する強い思いである。Setheにとって自分の母乳は自分の産んだ子供たちのものであり、十分に与えることができることを母親として誇りにしている。Baby Suggsの葬式の時、自分だけではなく子供たちにコミュニティの女たちが持ち寄った食べ物に手を付けることを禁じた挿話は、Setheのプライドの高さを示唆しているが、Setheの母乳は言わば母親のプライドである。したがって、Schoolteacherと甥たちが母乳を奪い盗る行為は、“a virtual rape of Sethe’s motherhood” (Rody 99)と見なすことができるのである。

Setheの子殺しの事実を知ったPaul DがSetheと議論するloveという語もまた、両者の視点から見ると異なる概念を持つと見なすことができる。18年前Schoolteacher一行が逃亡奴隷を捕まえにやってきたことを知ったSetheは、2人の息子HowardとBurglar、まだ乳飲み子だったDenver、及びDenverの姉“the crawling-already? girl”を殺害しようとし、“the crawling-already? girl”が喉を手のこぎりで切り裂かれて死亡した事件について、Sethe自身は“I took and put my babies where they’d be safe.” (193)と主張する。つまり、彼女の子供の殺害行為はSchoolteacherから子供たちを「守る」ためであり、子供を思う母親の愛からなされた行為だったと説明される。Setheの言うloveは彼女にとって音響イメージ通りの母親が子を思う“love”以外にあり得ない。

しかし、Setheの主張を聞いたPaul DにとってSetheの“love”は、“too thick” (193)である。Paul DはSweet Homeを後にして以後、アメリカ各地を転々としながら次に出会うものに対する「愛」を残しておくために、できるだけ辿り着いた先々での対象を浅く愛するように努めてき

たのだが、彼とは対照的に Sethe にとって、“Love is or it ain't. Thin love ain't love at all.” (194) であり、Paul D が考える “love” は “love” ではないと否定する。Andrew Schopp が “[S]afety equals death.” (205) と述べているように、Sethe が言う子供を「救う」ことは “kill” を意味し、“safety with a handsaw” (193) を語る Sethe に対して、Paul D は “You got two feet, …not four.” (194) と述べて、Sethe の “love” を人としての感情を逸脱した精神状態と見なしていることが彼のことばの間接的な動物の隠喩に示されている。

Sethe によって示される「濃すぎる愛」は、Barbara Schapiro が指摘するように、Morrison の第2作目の *Sula* において Sula の祖母 Eva による息子 Plum 殺害によって描かれる「愛」と共通する感情である (158)。戦争から戻った息子が薬物中毒になっていることに気づき、Eva は Plum を「男として死なせる」ために焼き殺すのだが、それは母性愛からなされた行為だと見なし得る。同じ子殺しでも *Beloved* において描かれる白人にレイプされた女たちがアフリカからアメリカへ向かう中間航路³⁾で赤子を途中の島に置き去りにしたり海に投げ捨てたり、父と息子に監禁されて性的虐待を受けていた Ella が彼らを “the lowest yet” (301) と呼び、生まれた赤子に母乳を与えることを拒否する挿話は、アフリカから連れてこられた女性たちが白人男性の性のはけ口としていかに悲惨な扱いを受けていたかを示しているが、彼女たちの赤子殺害は Sethe の「愛」とは対極の憎しみによる行為である。さらに、同一の殺害行為をもたらす「愛」と「憎しみ」に共通する思いの強さに注目して、Funk⁴⁾を下品なものを見なす Geraldine の情愛の欠如した子育て (*The Bluest Eye*) と Eva や Sethe の「濃すぎる愛」を対照させるとき、第4作目の *Tar Baby* でタールのイメージで具象化されているアフリカ系アメリカ人特有の母性が浮き彫りになる。

しかし、この「濃すぎる愛」は Sethe の子供たちに恐怖を与えることになる。小説の冒頭で2人の息子たちがブルーストーン通り124番地の家を逃げ出したのはその家にとり憑いて暴れる殺された赤子の幽霊のせいだとされるのであるが、やがて Sethe の子殺しの事件が本当の理由であることが明らかになる。Baby Suggs の死後、Sethe と一緒に暮らす Denver は自分も首を切られるのではないかと恐れて母親に髪をとかしてもらい間眠らない努力をする。Beloved と名乗る少女が現れて一緒に生活するようになると、Denver は母親の Sethe よりも先に彼女が Paul D に追い払われた幽霊の現身であり自分の姉であることを悟り、彼女を母親から守ることを自分の使命とするのである。つまり、奴隷制度の悲惨さを幼かったために記憶していない子供たちにとって、Sethe の「愛」は自分たちを守ろうとする母親の愛情とは到底認識できず、殺害という行為を引き起こした狂気と見なして恐れるのである。子供たちにとって Sethe の “love” は “death” の概念と結び付き、息子たちのように一人で生きていくことができる者はそれから逃げ出すことになる。

Denver が自分の姉だと認識した少女が自分の名前として名乗った “Beloved” にも幾重にも層を成すシニフィエを認めることができる。まずそれと結び付く最も明瞭な概念は18年前に Sethe が殺害した娘の名前である。Sethe と Denver が暮らす家に憑いていた赤子の幽霊が Paul D に追い払われてまもなく、現れた少女は遠くから来たというのに真新しい靴を履き、自分の名前は “Beloved” だと告げる。それは殺害された “the crawling-already? girl” の墓石に Sethe が10分間の性交渉と引き換えに石屋に刻ませた7文字であり、少女が水を貰って飲み続ける間 Sethe の排尿が止まらないという挿話は、2人の間に明らかな繋がりがあることを示唆するだけではなく、大量の尿を排出する場面は出産の際の破水を暗示する。少女の切り裂かれた傷跡を想起する首についた細い筋や赤子の

ように皺一つない皮膚といった身体的特徴、及び Sethe が昔 Sweet Home で Garner 夫人からもらったクリスタルのイヤリングについて尋ねたり、Sethe が創って子供たちに歌い聞かせた歌を口ずさんだり、Denver さえも知らない昔のことを知っていることが明らかにされることによって、Beloved は18年前に殺された赤子の18年後の姿であることが明らかにされ、“Beloved” はその子を表す固有名前となる。したがってこの“Beloved” という語は Sethe に愛された娘の名前という意味で文字通りのシニフィエと結び付いた語であると見なすことができる。

しかし、18年前に殺害された赤子の墓石に刻まれた“Beloved” は、元々、“the crawling-already? girl” と呼ばれるだけで名前を持たなかった赤子を埋葬する際に祈りを捧げる牧師が口にした“Dearly beloved” から採ったことばであり、特定の人を指す名前ではない。その語の由来を念頭に置けば、“Beloved” はカーニバルの日に突然現れた少女が Beloved と名乗ることによって、18年前に殺害された“the crawling-already? girl” の名前になると同時に、「愛された者」という不特定多数の人々を表すことばとも考えられる。作品後半の Beloved によるモノログでは、自分の上で目を見開いたまま男性が死んでいる情景や海に投げ落とされる人々が描かれることで、彼女が船荷のようにぎっしり詰め込まれた奴隷たちの一人として中間航路に行く体験を語っていることが分かる。この作品がアフリカから中間航路を経由して奴隷として拉致された“Sixty Million and More” に捧げられていることを考慮すれば、Beloved はこれらの無名の人々の一人であり同時に全体とも見なすことができる。もしそうだとすれば、“Beloved” のシニフィエはこれ以上ないほど皮肉である。これらの人々が被った運命は「愛された者」とは対極の過酷なものだったからだ。作品冒頭に置かれた聖書から引用された「ローマ人への手紙」の一節“I will call them my people, which were

not my people; and her beloved, which was not beloved.” (9:25) はまさにそれを暗示していると言えるだろう。

さらに、Beloved の “rememory” を引き出す力に注目したい。Beloved が現れるまで “the day’s serious work of beating back the past” (86) に明け暮れていた Sethe は、Beloved にせがまれるままに彼女の rememory を語り、あれほど思い出さない (disremember) 努力をしていたにもかかわらず Beloved に語る心が心地よいことに気づく。Sethe の rememory を聞こうとする Beloved の貪欲さは、“Sethe was licked, tasted, eaten by Beloved’s eyes.” (68) というように、Sethe から片時も目を離さず Sethe を食べつくすイメージで表現されている。Betty Jane Powell は Beloved を Sethe にとって “the receptacle for her stories” (149) と見なしているのだが、やがて Beloved は Sethe の rememory だけではなく、文字通り Sethe を吸収するかのよう肥大し、他方 Sethe は Beloved とは対照的に縮んでいく。このように描かれる “Beloved” は「現在」を生きる Sethe の生気を吸い尽くそうとする、言わば吸血鬼のような「過去」である。

Beloved が自分の元に戻ってきた娘だと認めた Sethe は、18年前の自分の行動が愛によるものだったと繰り返し説明するのだが、Beloved は Sethe が自分を「殺した」ことではなく、「置き去りにした」ことを責め続ける。この「置き去り」は娘だけを「安全」な場所へ送って Sethe 自身は来なかったことだと解釈できるが、母に「置き去り」にされた娘という事実が Sethe 自身にも当てはまることを考慮すると、この Beloved の主張は Sethe 自身の主張でもあることに気づく。Sethe は母親と思われる女奴隷が逃亡に失敗して首を吊られてぶら下がっている場面を幼いときに目撃している。Sethe にとって母親の死は衝撃的ではあったが、母親が自分を置いて逃げようとしたという事実さらに深く

傷ついたことが描かれている。もし“Beloved”が多くの名も無き奴隷たちだとすれば、「置き去り」にされたことを責める Beloved は Sethe 自身と言えるだろう。

さらに、“Beloved”が「過去」の概念と結び付くシニフィアンだと認めるならば、この Beloved の主張は単に母親が娘を置き去りにしたという事実とは別の意味合いを読み取ることができる。Sethe は過去を思い出さない (disremember) 努力をしてきたことはすでに述べた。自分の日常生活に「過去」を寄せ付けずに生きてきたことは Beloved にとって自分を母親が排除しようとするに等しい。辛い過去から目を背けることは、まさに“Beloved”を「置き去り」にする行為であり、その語は本来の「愛された者」の対極の概念を持つと言える。二度と置き去りにしないと Beloved に約束した Sethe が、娘を守るためにアイスピックを振りかざして“Beloved”から離れたとき、「過去」にがんじがらめになった Sethe を助けるためにやってきたコミュニティの女たちの手荒い助けによって、Sethe は「過去」との別離の第一歩を踏み出す。

さらに、“Beloved”が名も無き“Sixty Million and More”全体を具現した存在という概念と結び付くとすれば、“Beloved”は Sethe だけではなくこれらの人々の rememory の集合体と見なすことができる。Paul D が Beloved の“shining”に性的な誘いを知覚し、夜やってきた Beloved が彼に“touch [her] on the inside part and call [her] [her] name” (137) を要求する挿話は、表面的には若い娘が母親の恋人を誘惑する話であるが、Beloved が rememory の総体であるとなれば、“touch [her] on the inside part”は彼自身の rememory を直視することを意味する。Paul D が Beloved の内部に触れたとき、過去の記憶を閉じ込めて何をもってしても開かなかった煙草の缶の錆びついたふたが開き、かつて煙草の缶の代わりに在った「情熱」を認めて“Red heart”と叫ぶのである。

Beloved は rememory の集合体であるからこそ、自分がばらばらになるかもしれないことを恐れる。突然奥歯が抜けた Beloved の挿話は、それを如実に物語る。

Beloved looked at the tooth and thought, This is it. Next would be her arm, her hand, a toe. Pieces of her would drop maybe one at a time, maybe all at once. Or on one of those mornings before Denver woke and after Sethe left she would fly apart. It is difficult keeping her head on her neck, her legs attached to her hips when she is by herself. (157)

rememory は過去に起きた出来事の記憶がその地と一体化して存在するものである。つまり、rememory は元々ひとつの塊として存在するものではなく、この世の中に点在していると言える。その集合体である“Beloved”は、常に四散する可能性があることを自覚する。

また、かつて Sethe の逃亡を助け、Baby Suggs の友人だった Stamp Paid は、ブルーストーン通り124番地の家の外で家の中から聞こえてくる“conflagration of hasty voices” (202) を聞くのだが、それがことばとして表現された rememory であることを示唆する特徴が示されている。

七
九

The speech wasn't nonsensical, exactly, nor was it tongues. But something was wrong with the order of the words and he couldn't describe or cipher it to save his life. (202)

ことばで表現する際に意図した意味を伝えるために語順は必要条件である。それが喪失して無作為に発せられる語は、一つのまとまった話には

成り得ずにばらばらに存在する rememory をシンタクスが欠如した語句という形で表していると考えられる。Stamp Paid が唯一聞き取った“mine”という語は、Sethe と Denver それぞれのモノログにおいて互いに“Beloved”を“mine”と主張することばであることが明らかにされている。“Beloved”が rememory の集合体であることを念頭に置くと、Sethe と“Beloved”との関係が密接であることも頷ける。Denver は Sethe と“Beloved”との結びつきから排除され、初めて“Beloved”に飲み込まれつつある Sethe の危機に気づいて、これまで接触を断っていたコミュニティに助けを求める。これは Denver が姉の血を母乳とともに飲んで以来ずっと捕えられていた過去から解放されたことを物語る。

最後に Sethe の元に戻った Paul D が思う、“He wants to put his story next to hers.” (322) は、これからの二人の人生がこれまでのばらばらの記憶とは異なり、二つの物語が縫り合されていくことを暗示する。一方、“Beloved”はこの作品の最後に繰り返される“It was (is) not a story to pass on.” (323-4) に示されているように、“a story”として語り伝えられることはない。それは Sethe や Paul D を初めとした“Sixty Million and more”の過去であり、“unspeakable thoughts, unspoken” (235) だからである。最後に置かれた“Beloved.”という一語は、*Beloved* というこの作品に描かれる物語も含めてその語が結び付くあらゆる概念を内包した詠嘆と読めるだろう。

注

- 1) 難波江和英、内田樹『現代思想のパフォーマンス』（光文社新書、2004）25。なおソシュールの『一般言語学講義』についての記述は、上記の書と同書のハードカバー（松柏社、2000）を参照。

- 2) Toni Morrison, *Beloved* (New York: Alfred A.Knopf, 1998) 43. 以後テキストはこの版を使用し、ページ数のみを記す。
- 3) the middle passage: アフリカ西岸と西インド諸島との間の中間航路。大西洋の真ん中で航海日数が長く、奴隷貿易に利用されて多くの死亡者を出した。(新英和大辞典)
- 4) Wilfred D. Samuels & Clenora Hudson-Weems の *Toni Morrison* においては、Geraldine にとって “Funk” は blackness と結び付くものと説明され (12)、吉田迪子著『トニ＝モリスン』(清水書院 1999) では、「白人文明に同化するために、黒人が自らの内から駆逐しようとする人種的感性」と定義されている (94)。また、Susan Willis, “Eruptions of Funk: Historicizing Toni Morrison” は、その概念そのものを *The Bluest Eye* を論ずる際の中心テーマとしている。(拙書234)

参考文献

- Morrison, Toni. *Beloved*. New York: Alfred A. Knopf, 1998.
- Powell, Betty Jane. “will the parts hold?: The Journey Toward a Coherent Self in *Beloved*.” *Understanding Toni Morrison’s Beloved and Sula*. Ed. Solomon O. Iyasere, Marla W. Iyasere. New York: Whitston Publishing Company, 2000.
- Rody, Caroline. “Toni Morrison’s *Beloved*: Hestory, “Rememory,” and a “Clamor for a Kiss.” *Understanding Toni Morrison’s Beloved and Sula*. Ed. Solomon O. Iyasere, Marla W. Iyasere. New York: Whitston Publishing Company, 2000.
- Samuels, Wilfred D. Clenora Hudson-Weems. *Toni Morrison*. New York: Twayne Publishers, 1990.
- Schapiro, Barbara. “The Bonds of Love and the Boundaries of Self in Toni Morrison’s *Beloved*.” *Understanding Toni Morrison’s Beloved and Sula*. Ed. Solomon O. Iyasere, Marla W. Iyasere. New York: Whitston Publishing Company, 2000.
- Schopp, Andrew. “Narrative Control and Subjectivity: Dismantling Safety in Toni Morrison’s *Beloved*.” *Understanding Toni Morrison’s Beloved and Sula*. Ed. Solomon O. Iyasere, Marla W. Iyasere. New York: Whitston Publishing Company, 2000.
- Wills, Susan. “Eruptions of Fwnk: Historicizing Toni Morrison.” *Toni Morrison’s The Bluest Eye*. Ed. Harold Bloom. Philadelphia: Chelsea House Publishers, 1999.
- 難波江和英、内田樹『現代思想のパフォーマンス』松柏社、2000。光文社新書、2004。
- 永瀬美智子『トニ・モリスン研究 (I)』私家版、2005。
- 吉田迪子『人と思想 159 トニ＝モリスン』清水書院、1999。